

私のお気に入り



金沢市 鈴木大拙館

二〇一一年に鈴木大拙館は、氏の没後四〇年ほどして金沢市に建築されました。石川県立美術館の裏の「美術の小径」を下った山の際、住宅地に入る所の小さな建物です。博物館でも美術館でもなく、そのままの鈴木大拙館という名前がついていて、鈴木大拙の生涯に学び思想に出会う場所として定義されています。思索館でしょうか？

鈴木大拙さんは、一八七〇（明治三）年金沢市で出生、二二歳で現東京大学入学、二七歳から三九歳、つまり一九

〇九年までアメリカで編集員として仕事をしながら、禅や仏教の紹介をアメリカでされています。彼が一九〇七年に在米中に書いた、『大乘仏教

概論 (Outlines of Mahayana Buddhism)』は、もともとが

格調高く書かれた英文でした。その後日本に戻り、学習院大学、大谷大学の哲学科の教授に就任、また四〇年経って、七九歳から八八歳まで再度米、ニューヨークに居住しながら、世界各国で禅や仏教、日本文化についての講演、八九歳で帰日し一九六六年九五歳で亡くなった方です。

とにかくスケールが大きいのです。前述した『大乘仏教概論』（鈴木大拙著、佐々木閑訳）も原著出版後ほぼ一〇

〇年経った最近の二〇〇四年に和訳が初めて出版されたという話です。

一つエピソードを紹介しましょう。受付横に小さな売店があり、クリアファイルなどの記念品などがあります。そこで自然な書字がプリントされているTシャツが販売されているのを見つけ、読みづらいいのですが、ひらがなで「それはそれとして」と書かれています。鈴木大拙さんは、深遠で禅的な哲学者なのに、「それはそれとして」って書きますか、ふっう？ あまりのギャップに吹き出してしまいました。その笑った僕をみて、受付にいた副館長の宮田さんが来てくれて、いきさつを説明していただきました。これは鈴木大拙さんが九〇歳

頃の時（一九六〇年頃）、お手伝いの少女に請われて書いたもので、またそれをみて感銘を受けた著名な方々の話などもしていただきました。僕が感じたのはその語り様が素晴らしいので、その有り様が、鈴木大拙さんの生き様に直接につながっているような気がしました。

生来のそそっかしさから、館内を見たあとでも、鈴木大拙さんは没後一〇年くらいかなと思っていたのです。でも氏は亡くなって約五〇年なのでした。館の「思索空間」から「水鏡の庭」、あの水面をみながら佇んでいますと、瞬間の永劫さ又は永劫の瞬間さ、というのを感じました。

駒木小児科クリニック

駒木 智